

TOKYO PAPER

ト キ ョ ー ペ ー パ ー
for Culture

フォー カルチャー

見慣れたコピー、記号化された情報に、思考は停止するばかり。新陳代謝の激しいこの街は、今日はあるけど、明日はないかもしれないものに溢れている。「なんでもあるようで、なんにもない」。そんな想いに時折駆られても、突き詰めてみれば人も街も等しく生もので、変化のなかを生きていた。だからこそ毎日愛おしい。例えば隣人と挨拶を交わす。ささやかな習慣、日々の積み重ねが街の風景を変えていく。「首都・東京」から、「私の住む街東京」へ。小さな単位で誇らしく、この街と生きていこう。

Encoded information and banal advertisements surround us, paralyzing thought. In this city where the new constantly replaces the old, what exists today may well be gone tomorrow. The city offers everything and nothing at all. Who has not been seized by that feeling from time to time? Yet in truth the city, like the humans who inhabit it, is a living being that exists in a state of flux—and this is what makes each day here a gift. Think of the greeting exchanged with a neighbor. Day by day this tiny action accumulates, transforming the urban landscape. "Tokyo, the capital of Japan," becomes "Tokyo, my hometown." Proud of its smallest facets, we share our lives with this city.

第七号 / 007



こんにちは、東京ローカル

蜃気楼の街が照らす光

水道橋博士(芸人) × 安藤桃子(映画監督) × 曾我部恵一(ミュージシャン)

研究テーマ⑦: TOKYO FABBERS

誰もが作り手になれる、デジタルものづくり革命

TOKYO LOCAL PRESENTATION / 私にとって東京文化とは、



蜃気楼の街が 照らす光

大都市、東京……ではなく、自分が暮らし、自分を営む街として、できるだけ小さな単位、ローカルな眼差しで東京を見つめたい。そんな想いに駆られた第七号。とするなら客員研究員は、この3人！水道橋博士さん（芸人）、安藤桃子さん（映画監督）、曾我部恵一さん（ミュージシャン）。直感に導かれ、お招きしました。

The sprawling city, Tokyo...Instead of that, our 7th edition is built on looking at Tokyo through as narrow a lens as possible. We want to see the local Tokyo, the Tokyo where we live and pursue our own activities. We invited three guest researchers we believe to be best suited for the topic: Hakase Suidobashi (comedian), Momoko Ando (film director), and Keiichi Sokabe (musician).



待ち合わせは、門前仲町。江戸の情緒を色濃く残す街並みと商店街のにぎわいが印象的なこの街で、初対面を果たしたお三方は、そのまま富岡八幡宮から辰巳新道までをぶらり散策。表現者としてメジャーなフィールドで活躍されるお三方ですが、眼差しはやっぱり、どこまでもローカルでした。

安藤桃子（以下安藤）：生まれも育ちも東京の、私が思うこの街の印象って、かなりサニーデイ・サービスの『東京』と直結しているんです。青春と真ん中の学生時代にこのアルバムに出合って、何度も聴いているうちに「東京ってこんな街なんだな」って、初めて客観視できた気がして。

曾我部恵一（以下曾我部）：それはうれしいです。『東京』は、自分が上京する前にイメージしていたこの街の風景と、上京して暮らすことによって見えてきた風景がミックスされながら生まれたアルバムなので、すごく青くて初々しい音が詰まっています。気恥ずかしいですけど、そのぶん、特別なアルバムです。

安藤：東京って東京から離れていた人たちの目線で作り上げられた街でもあるんですよ。まだ上京したてという曾我部さんが作られた『東京』が、私にとってはすごく“東京”らしかった。博士さんのtwitterをフォローしてよく拝見させていただいているんですけど、映画を始め、博士さんはいろんなカルチャーにも造詣が深いんですよね。その眼差しがまた東京の文化を作っていると思うんですけど、その博士さんも東京出身ではなくて。そうやって突き詰めていくと、今や生粋の江戸っ子は下町に行かないとなか

なか出会えないですし、東京って意外と本質がないというか、まるで蜃気楼のような街だになって、センチメンタルな気分になります。**水道橋博士（以下博士）**：僕は倉敷から上京してもしばらくはストレンジャーな感覚でいましたね。

安藤：そうなんですか？

博士：やっぱり「田舎を捨てる」という意識で上京してきたので「30歳までに芸人として一旗揚げなければ、終わりだ」と思っていましたから。その焦り、タイムリミット感がストレンジャーというか。上京した頃の僕は、相棒（玉袋筋太郎）と一緒に浅草のストリップ小屋（浅草フランス座）で住み込みしながら、芸人修業をしていたんですよ。まあ、当時はひどかったですね……。生きるか死ぬか、本当に人生漂流していました。時代はバブル全盛期。浮かれ切った世間を尻目に、毎日16時間労働で日給1,000円。時給にすると60円です。今振り返ってみてもよくそんなことできたなって。でも当時の浅草は、そういう僕のような明日無き人、なんの将来設計のない人たちが集まってくるような街で。

安藤：まるで苦学生のように、お金はないし、明日も見えない。だけど自由はある。そんな文化の染み付く東京が、私は好きです。

博士：出発は四畳半だけど、志さえあれば青天井にいけるよって、上までいけるよって感じがしないと、なんていうか、抜けが悪いですよ。それを求めてみんな浅草にやってきて。そんな当時のことが強烈に心に染み付いているから、今も浅草と同じ匂いのする街、例えば下北沢とか高円寺とかそういう街にいる方が、自分は気が楽なんです。

曾我部：今、下北沢に自分の音楽レーベル (ROSE RECORDS) があるんですよ。僕は自動車免許がないので、基本的に移動手段は徒歩か自転車。それもあって自分の生活圏内に仕事場が欲しくて、10年前にこの街で立ち上げました。

博士：徒歩や自転車の人は、ローカル感が強くなりますよね。生活圏が狭くなるから。
曾我部：そうですね。それはちょっと不便かもしれないんですけど、僕は自転車の範囲で見える風景と暮らしていきたいなっていう気持ちが常にあったので。でも当時の音楽事務所といえば、青山、原宿、六本木界隈が常識っていう時代で、よく「下北沢で事務所やるの!？」って驚かれました。今は昔よりも場所に対するイメージやこだわりって周りも自分もないですけど、そ

の当時は場所に対する人のイメージや先入観ってすごくあった時代でしたから。

博士：僕は代官山とかに行くときちょっと気分が上がります。でも同時に入っちゃいけない感じもしますね。やっぱり自分にはアウェイな空気を感じるんですよ。今高円寺に住んでいるんですけど、これから先も中央線沿線以外住めないだろうなあ。

安藤：街の在り方がそのまま人の在り方になることってありますよね。

曾我部：そこから見える風景がどこかで自分が作るものに無意識にも影響しているのは確かですね。

博士：仕事でいろんな人と対話するとき意識するのは、その人のジャンルや肩書きとかよりも、どこで生まれてどう育ち、今はどこに住んで何を見て過ごしているのか……とか、

そういう今の地点に至るまでの道程なんですよ。年輪を見るというか、その方がその人の本質に辿り着くのが早い気がします。

孤独が和らぐとき

博士：(安藤さんは) 映画を高知で撮って、それでよく高知に移住しましたね。

安藤：3秒ぐらいで即決でした。きっと江戸っ子の血が高知で騒いだんだと(笑)。

曾我部：それはどういうことですか？

安藤：その場限りでも触れ合うあたかさまみたいなものが、東京の各地域には色濃くあって、私はそんな東京の文化が大好きなんです。例えば新宿ゴールデン街に行って写真を撮ろうとすると「写真は撮らないで!」って雰囲気があるんですよ。それはみんなプライベートには触れられたくない事情を抱えていたりするからで……、でも目があえば「おう!」ってちゃんと笑顔で挨拶を交わしてくれるし、プライベートには触れなくても心で対話ができる実感が持てる。それってきっと長屋文化のあった江戸時代から育まれたものだと思うんです。うちの母方は生粋の江戸っ子なので、私はその血を受け継いでいるから、きっとそう



客員研究員の証はこのロゼット!

This rosette shows that they're our guest researchers!



Hakase Suidobashi

Momoko Ando

Keiichi Sokabe



いうところに惹かれるんだろうなって。でも15歳でイギリスに留学して、その後ニューヨークで暮らして、いざ東京に戻ってみると、私が好きだったその文化が衰退しているように感じられて。どこに行っても目を逸らされてしまうことが多くなって、すごく悲しい想いになってしまったんですね。

博士：高知はあたたかかった。

安藤：そうですね! 高知には私が東京で求めていたものが凝縮されていて。だから東京が嫌になったわけではなく、東京で感じていたあたたかさが、高知にあるから移住したのかな。それで今、高知を日本のハリウッドにしたいという企みもあつたりします。

博士：高知は日照時間が長いから、環境的にも映画製作に向いていますよね。

安藤：はい。海、川、山の三拍子も揃っていますし、人のパワーがすごい。受け入れ態勢がすごくオープンで、『0.5ミリ』の撮影をしてもひとつも問題が起らないし、地元の方にエキストラをやっていたとしてもこれまた芝居がうまい。「一体何!?

この街!」って(笑)。そして何よりここなら、私は孤独死しないと思いました。

曾我部：確かに。ツアーで行ったことがあるのですが、高知はみんな優しい。そう、だから高知のような街があるからこそ、逆に東京は孤立する良さがあったと思うんですね。でも……、これからは家族や隣近所との対話、関係性というのがすごく大事になってくるんだろうなって思います。例えば、階段でおばあさんがすごく重い荷物を持って辛そうにしているときに、誰も手を貸そうとしない風景ってもう当たり前ですよ。僕自身も、手を差し伸べることに遠慮してしまうこともあります。でもそうではなくて、「大丈夫ですか?」と一言かけてみる。さりげないけれど、そういう行動が「ローカル」なんじゃないかなって思います。

博士：そういう「人たらし」というか、すでにできあがった人間関係のあいだにすっと忍び込める人って、今の時代少なくなってきていますよね。その異能の人のような人物を、『0.5ミリ』では主人公がやっ

ているわけですけど(※)、この能力って東京の人にはすごく欠けている気がしています。それがまた、「2020年、成長の夢」で、淀んでしまう感じがするんですよね。「東京万歳! オリンピック」って言いながら、高齢者の方は増えていくし、孤立していくし、そういう部分はどんどん見放されて貧しくなっていくのではと、予感のようなものは映画を観ながら感じました。

安藤: 私は子供と老人、この両者が繋がる真ん中に平和がある気がしています。古くからそれをきちんとやってきたのが日本人だと思うんですけど、今はそれがどんどん崩壊しているから、すごくバランスが悪い気がしています。その課題に対

するいろんな答えが、高知にはきっとある気がするんです。やっぱり東京が大好き、日本が大好き。だからこそ、この先を良くしたい。そのために高知に住んでいます。**博士:** 一度きりではなくて、ずっと高知で映画を撮り続けること。そうやって高知から東京を照らし続けることができればいい。ぜひやって欲しいなあ。

安藤: 生粋の江戸っ子だった祖母は何かある度に「死にゃあしない」と言っていました。それは私にとって魔法の言葉です。というのも、これから映画監督であることにぶれはないんですが、入り口から出口まで全部のことを自分で考えたら、「これは映画だけ作っている場合じゃねーぞ」と。

だから「ないなら作ろう、作ればいいじゃん」という発想で、足りないものを自分たちの力でゼロから一つずつ作っていきたいです。失敗しても死にゃあしないと思って。**曾我部:** 街が繁栄するほど、ほころびも生まれて、心だけが置きざりになることがあると思うんです。本来音楽や芸術というのは、そういう繁栄から遠くにある、もっと人の心の根本にある、大事な部分に触れるものはず。今はインターネットの普及で色々なことが発達して便利な世の中になりましたけど、でも僕の事は10年前と何も変わってなくて。それは待ってくれる人がいる場所に行き歌うことです。こればかりは今後、何が発展し

ても変えようがないんです。

博士: 僕も「浅草キッドは47都道府県でライブやります」と宣言してみたりして。なんだかそういうこともやってみたい気がするんですけどね。

安藤: それはすごい!

曾我部: 観てみたいですわね。

博士: 笑ってひとつのコミュニケーションですから。そういう意味では音楽や映画も同じ場所にあると思うんです。この社会の孤独を少しでも和らげるためのコミュニケーションだと。

※介護ヘルパーの仕事をしている主人公は、ある事件をきっかけに、仕事も住む場所も失う。ワケありの老人を見つけてはおしかけヘルパーをして生きていく。

The city of mirages shines with light

Momoko Ando: Born and raised in Tokyo, my impressions of the city are actually formed by Sunny Day Service's album Tokyo.

Keiichi Sokabe: Tokyo was born from a mix of my images of the city before I moved here and the actual environment I found myself in after arriving, so it's got a very fresh, unsophisticated sound to it. It's a bit embarrassing, but for that reason it's a very special album.

Ando: Tokyo is also a city that's created by those who aren't actually in the city. Tokyo, made just after Sokabe came to the city, struck me as very Tokyo-esque. Unpacking that a bit more, you can't really meet the trueborn Tokyoites unless you go to Shitamachi. It's like Tokyo is actually a mirage.

Hakase Suidobashi: I very much felt like a stranger for a while after I came to Tokyo from Kurashiki.

Ando: Really?

Hakase: Well, I came to Tokyo with the intention of "throwing away my hometown," so I felt that I really had to make it as a comedian before I turned thirty. I felt like a stranger because of that time limit and sense of urgency. When I came to Tokyo, I was living with my comedy duo partner (Tamabukuro Sujitaro) in a small strip club in Asakusa (Asakusa France-za) while I serving my apprenticeship as a comedian. There were many others like me in Asa-



kusa at that time – no tomorrow, no plan for the future.

Ando: Just like a starving student. No money, you can't see tomorrow, but you've got freedom. I like that that kind of culture takes root in Tokyo.

Hakase: You start on 4.5 tatami mats, but

as long as you've got ambition you can reach the sky. You can't get anywhere without that feeling. That's why everyone came to Asakusa. Those Asakusa days are so ingrained in my memory that I find myself at ease in neighborhoods that give off the same feeling as Asakusa, such as

Shimokitazawa and Koenji.

Sokabe: My label, Rose Records, is based in Shimokitazawa. I don't have a driver's license, so I have to walk or bike to get around. That was part of the reason why I started my label in this neighborhood ten years ago. I mean, I wanted my workplace to be near where I lived.

Hakase: If you walk or bike you really feel like a local. The scope of your life narrows down quite a bit.

Sokabe: Exactly. I always felt like I wanted to be embedded in the local area, living in a small sphere of life that only extended as far as I could go on my bike. But at the time almost every label was based in Aoyama, Harajuku, and Roppongi, so people were always surprised to hear that I was in Shimokitazawa.

Hakase: I feel a bit excited when I go to places like Daikanyama. But I also feel like I shouldn't really be there, you know? I feel out of place. I'm living in Koenji now, and I'm pretty sure I won't be able to live anywhere off the Chuo line.

Ando: People become like the place they're from, right?

Sokabe: The environment around you definitely starts to have an unconscious influence on the things you make.

Hakase: When I interview with people, I always pay more attention to where someone was born and raised, where they're living and what they see every day, than I



do to their title or type of work. I've been meaning to ask, but Ando – you shot a film in Kochi, and then you moved down there, right? That's quite something.

Ando: It was a three second snap decision. I'm sure my Tokyo blood is freaking out in Kochi (laughs).

Sokabe: What do you mean?

Ando: The places in Tokyo each have a deep warmth that you can only find by interacting with the people there. I really like that aspect of Tokyo culture. I think that's a holdover from the Edo period's row house culture. My mother's side is pure Tokyoite, and I've got Tokyo blood flowing through my veins, so I'm really moved by things like that. But lately I feel like that culture that I love is on the decline.

Hakase: And Kochi was warm.

Ando: Exactly – Kochi condenses everything that I desired about Tokyo. I don't want to imply that I started hating Tokyo. It's just that I felt the Tokyo warmth in Kochi, so I moved there. And so I'm trying to make Kochi into Japanese Hollywood.

Hakase: Kochi must be nice for filming too, since it stays light for so long.

Ando: Yes. It's got the trifecta of the

ocean, rivers, and mountains, plus the people are amazing. Their attitudes are very open and accepting. When I was filming *0.5mm* I didn't have a single problem. I feel like I don't have to worry about ending up alone if I live here.

Sokabe: I think it is precisely because there are places like Kochi that Tokyo has the merits of being able to be isolated. But...I feel like interactions with family and neighbors are going to become more important from here on out. If something happens, people will be asking if you're okay, rather than pretending they didn't see anything. I think that's the meaning of "local," really.

Hakase: The number of people who can slip into those sorts of already established network of people is decreasing nowadays. The protagonist of *0.5mm* is one of the people who can do that, but I feel like that's a skill that's really lacking in Tokyo. And the slogan, "2020, Dreams of Growth" really feels stagnant to me. Everyone is running around excited for the Olympics, while in reality the number of elderly people is increasing and they are growing more and more isolated. Watching the film,



I really felt that those parts of our society were being forsaken.

Ando: I think that harmony exists in the connection between children and the elderly. But since that sense is falling apart recently, I think there isn't much balance anymore. I also feel there are quite a few answers to that problem to be found in Kochi.

Hakase: So you plan on continuing to shoot films there. If you manage to continue to spotlight Tokyo from Kochi that way, it'd be really impressive.

Ando: My grandmother, a true Tokyoite, always said, "Well, it's not like I'll die," whenever something happened. Those are magic words for me. For, while I have no intention of abandoning directing, looking at the whole picture from beginning to end, I'm starting to think that this isn't the time to be making only films. That's why I've decided to make whatever I find lacking, one by one. Even if I fail, it's not like I'll die.

Sokabe: Even though the Internet has made life and new development much easier, my job hasn't changed from what it was 10 years ago. My job remains going to people who are waiting for me, and singing to them.

Hakase: I might as well say that Asakusa Kid will be doing performances in all 47 prefectures in Japan.

Ando: That's amazing!

Sokabe: I'd like to go see that.

Hakase: In the end, comedy is a form of communication. I think music and film are in the same space. They're communication that eases the loneliness of society a little bit.



曾我部恵一 Keiichi Sokabe

1971年香川生まれ。自主レーベル「ROSE RECORDS」を主宰しながら、ソロを始め、再結成したサニーデイ・サービスなどで活動。2014年10月、サニーデイ・サービスのニューアルバム『Sunny』をリリース。

Born in 1971 in Kagawa. While running his own record label, Rose Records, he plays as a solo act, in the reunited Sunny Day Service, which released their newest record, *Sunny*, in October 2014.

安藤桃子 Momoko Ando

1982年東京生まれ。2010年脚本を務めた『カケラ』で監督デビュー。2011年初の書き下ろし長編小説『0.5ミリ』を刊行。同作を自ら監督した『0.5ミリ』が、2014年11月に公開。現在高知に移住し、観光特使を務めている。

Born in 1982 in Tokyo. She debuted as a director with the self-written *Fragments* in 2010. She published the novel *0.5mm* in 2011 and directed the film version of the book that opened in November 2014. She currently lives in Kochi, where she works as a sightseeing ambassador.

水道橋博士 Hakase Suidobashi

1962年岡山生まれ。1987年「浅草キッド」としてコンビを結成。以来、テレビ、ラジオなどのメディアや著書の執筆など幅広く活躍。最新刊に『藝人春秋』がある。有料メールマガジン「水道橋博士のメルマ旬報」を月2回配信中。

Born in 1962 in Okayama. He formed the duo "Asakusa Kid" in 1987, and has since made appearances on television, radio, and in writing. He recently published *Geinin Shunjuu (Comedians' Chronicle)*, and publishes a bi-monthly e-zine called *Suidobashi Hakase No Meruma Junpou*.

Fab (ファブ) って何? What's Fab?

3Dプリンタやレーザーカッターなどのデジタルファブリケーションツールの普及によって、個人が作りたいたいものを、日常的に少量生産できる“Fabulous=愉快”な“Fabrication=ものづくり”のこと。また、Fabスペースの多くは知識や技術、ものづくりの楽しみを共有し、人との交流を促すコミュニティとしての役割も担っている。

With 3D printers, laser cutters, and other digital tools increasingly common, ordinary people are now able to manufacture small batches of everyday items that in the past only factories could supply. The term “fab” refers to this fabulous new model of fabrication. Fab spaces are also communities for sharing knowledge, techniques, and the joy of making.



Research topic (7)



研究テーマ⑦

TOKYO FABBERS

誰もが作り手になれる、デジタルものづくり革命

ほしいものを買う時代から、自分で作る時代へ——。近年、世界的な盛り上がりを見せる“Fab (ファブ)”によって、ものづくりはより身近になり、つくれるものも表現できる幅も広がっています。ブンプロの東京アートポイント計画では、東京・渋谷周辺のものづくり拠点をネットワーク化する「TOKYO FABBERS」プロジェクトを開始。新たなものづくりにチャレンジする人＝FABBERを応援している6つの拠点を取材しました！

We're moving from the era of buying to a new era of making. The rise of digital fabrication, or “fab,” lets ordinary people manufacture a wider range of items with greater creative freedom than ever before. BUNPRO's Tokyo Artpoint Project has launched the TOKYO FABBERS project, which builds ties between “maker spaces” in Tokyo's Shibuya district. We profile six of these sites below.



FabCafe Tokyo

ものづくりを通じて交流できるクリエイティブなカフェ
A creative cafe where making and mingling meet



開かれたカフェ空間にFab機能をもたせることで、誰もが気軽にデジタルなものづくりに参加できるきっかけを提供。食品専用のレーザーカッターでマカロンにメッセージを入れるなど、初心者が楽しくクリエイティブを体感できる。また、ワークショップやトークイベント、海外のFabCafeとの連携など、人とのつながりや知識の共有から生まれる新たな人材、新たなものづくりが循環する場としても機能している。

By combining digital fabrication tools with an open cafe environment, FabCafe Tokyo offers an easy opportunity for anyone to join in the maker movement. Tools like a laser cutter specially geared toward use with food let first-timers try their hand at fun activities like etching messages in macaroons. Workshops, discussions and exchanges with FabCafes abroad make this a site for sharing knowledge and meeting new people, too. The end result is a positive feedback loop of new skills and new kinds of fabrication.



様々な人がFabCafeをきっかけに出会い、つながっていく。カフェ空間だから起こる“セレンディピティ”な広がりを期待しています！

FabCafe Tokyo is bringing together a diverse range of people and building lasting connections between them. The relaxed cafe environment is the perfect place for serendipity to do its work!

最高執行責任者/
バリスタ
川井敏昌さん
COO / Barista
Toshimasa Kawai

東京都渋谷区道玄坂1-22-7 道玄坂ピア1F | TEL.03-6416-9190 | fabcafe.com/tokyo/ | 使用可能な機材：レーザーカッター、3Dプリンタ、カッティングマシン、パワフルミシン、3Dペン、3Dモデラ、3Dスキャナ、スキャナ

1F Dogenzaka Pier, 1-22-7 Dogenzaka, Shibuya-ku, Tokyo | TEL.03-6416-9190 | fabcafe.com/tokyo/ | Available equipment: laser cutter, 3D printer, cutting machine, industrial sewing machine, 3D pen, 3D modeling software, 3D scanner, scanner

FabLab Shibuya

課題解決のための“Do It With Others”を実践
A “do it with others” approach to problem solving



先進国から途上国まで約50カ国、500カ所以上に点在するFabLabは、一つひとつがローカルな実験工房でありながら、情報を交換し合うグローバルなネットワークでもある。自分のための“Do It Yourself”だけでなく、そのノウハウを他者と共有して課題を解決していく“Do It With Others”なものづくりを実践。また、用品店で購入した商品にデジタル加工してカスタマイズできる初心者向けの「&Fab」も運営中。

With over 500 sites in approximately 50 countries at all levels of economic development, FabLabs are local workshops connected in a global network of information exchange. The labs take the “do it yourself” mentality to the next level by encouraging participants to share knowledge and solve problems through a “do it with others” approach. There's also a beginner-oriented workshop called &Fab where users can customize items bought elsewhere with digital tools.



デジタルものづくりのノウハウをより総合的に学べる、プロジェクトベースのオープンラボを開催しています！

At this project-based open lab users can learn a full range of digital fabrication skills.

ディレクター
井上恵介さん
Director
Keisuke Inoue

東京都渋谷区宇田川町42-6 co-lab 渋谷アトリエ1-3 | TEL.03-6416-4083 | www.fablabshibuya.org/ | 使用可能な機材：レーザーカッター、3Dプリンタ、ペーパーカッター、デジタル刺繍ミシン

co-lab Shibuya Atelier 1-3, 42-6 Udagawacho, Shibuya-ku, Tokyo | TEL.03-6416-4083 | www.fablabshibuya.org/ | Available equipment: laser cutter, 3D printer, paper cutter, computerized embroidery machine

Makers' Base

個人の“メーカー”を育てる基地に

A center for educating tomorrow's "makers"

元工場をリノベーションした800㎡を超える空間に、木工、金工、陶芸、テキスタイルなど幅広い領域の機器が100以上も並ぶ大型工房。手しごとによる“アナログファブリケーション”を主軸とするMakers' Baseでは、デジタルファブリケーションツールは補助的に使われることが多い。専門スタッフによるトレーニングのほか、ECサイトや実店舗での販売支援、作品展など個人“メーカー”を応援する。

This huge workshop located in an 800m²-plus renovated factory features more than 100 machines for everything from woodworking and metalworking to ceramics and textiles. The fundamental approach at Makers' Base is “analogue fabrication” – in other words, making by hand – so digital fabrication tools play a mostly supplementary role. In addition to training sessions led by expert staff, the center runs online and brick-and-mortar shops and hosts exhibits and other events to support makers.



Makers' Base

Personal Brand Supporter



初心者向けワークショップでも、普段使いできる完成度の高い作品づくりをめざします。“つくるという体験を買う”文化を楽しんで！

At Makers' Base, even the beginning-level workshops aim for highly finished products that participants can use in their everyday lives. The experience of making is on sale here!

最高執行責任者
松田純平さん

COO

Jumpei Matsuda

東京都目黒区下目黒2-5-12 | TEL.03-5719-6580 | makers-base.com/ | 使用可能な機材：レーザーカッター、CNCマシン、3Dプリンタ、3Dモデラ、スキャナ、デジタル刺繍ミシン、木工機器、金工機器、塗装機器、陶芸用具

2-5-12 Shimomoguro, Meguro-ku, Tokyo | TEL.03-5719-6580 | makers-base.com/ | Available equipment: laser cutter, CNC (computer numerical control) machine, 3D printer, 3D modeling software, scanner, computerized embroidery machine, woodworking and metalworking machines, coater, pottery tools

HappyPrinters HARAJUKU

デジタルプリントが主役の実験的な印刷工場

A digital print shop with an experimental approach

Fabと言えば3Dツールが主流な中、2Dのデジタルプリントを軸に、インクジェットを持つ可能性や表現の幅を追求している。プロ仕様の業務用デジタルプリンタが稼働している様子は、まるで本物の印刷工場さながら。写真などを使えばデジタルデータなしでもFabを体験できるため、老若男女を問わず初心者の方も多く訪れる。今後は、TOKYO FABBERSの他拠点と連携したワークショップも開催予定。

3D tools are the norm for digital fabrication, but this shop explores the possibilities and creative breadth of inkjet printers, a 2D technology. The workspace looks just like a commercial print factory with its professional-level digital printers running full speed. You can try out the technology using a photograph (no digital data required), so HappyPrinters HARAJUKU is popular with people of all ages and level of experience. The company plans to hold workshops in collaboration with other TOKYO FABBERS sites in the future.



コンセプトは、“世界一ワクワクする印刷工場”。布やポリエステル、フェイクレザー、アクリルなど様々な素材にプリントする楽しさを実感して！

Try printing on fabric, fake leather, acrylic and a wide selection of other materials at this shop that calls itself “the most exciting printer in the world.”

クリエイティブ担当
杉原彩子さん

Creative Director

Ayako Sugihara

東京都渋谷区神宮前3-27-15 FLAG 1B | TEL.070-5370-6700 | happyprinters.jp/ | 使用可能な機材：UVプリンタ、Latexプリンタ、レーザーカッター

FLAG 1B, 3-27-15 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo | TEL.070-5370-6700 | happyprinters.jp/ | Available equipment: UV printer, latex printer, laser cutter



coromoza

ファッションの未来を見つめる洋服づくり

Crafting clothes with an eye toward fashion's future

ファッションに特化した、“個人のアトリエ”的なコワーキングスペース。洋服づくりにはデジタル機器で代用できない多くのプロセスがあるが、Fabの概念を取り入れながら、従来のやり方では難しいとされる小ロットかつ低予算の個人レベルで、商業として成り立つアパレル文化の発信をめざしている。服飾系専門学校生や業界関係者の利用も多く、新たな発想が生まれるような交流イベントや勉強会なども開催。

Independent designers run mini ateliers at this fashion-focused coworking space. Individuals producing small lots with limited budgets have struggled in the past to enter the industry. While digital tools can't always substitute for established dressmaking methods, this workshop incorporates concepts from the digital fabrication movement with the goal of making small-scale apparel production commercially viable. Popular with fashion students and working designers alike, coromoza also offers classes and events to nurture fresh ideas.



coromoza

fashion laboratory



個人でもアパレルに参入できるなど、ファッション産業の構造をつくり変えたり、業界の未来図を創造していく仕掛けづくりの場でもあります！

Coromoza is transforming the fashion world by enabling independent designers to manufacture apparel. They're not just designing clothes – they're designing the future of the industry.

代表取締役
西田拓志さん

CEO

Takuji Nishida

東京都渋谷区神宮前6-33-14 神宮ハイツ408号 | TEL.03-6450-5560 | za.coromo.jp/ | 使用可能な機材：ミシン、デジタル刺繍ミシン、レーザーカッター、パターン台、プリンタ複合機、テキスタイルプリンタ、3Dキャド、スキャナ

Jingu Heights #408, 6-33-14 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo | TEL.03-6450-5560 | za.coromo.jp/ | Available equipment: sewing machine, computerized embroidery machine, laser cutter, pattern table, all-in-one printer, textile printer, 3D CAD software, scanner

IKEJIRI INSTITUTE OF DESIGN "PTA" / IID 世田谷ものづくり学校「PTA」

産業が生まれるプラットフォームをめざす

Aiming to be a platform for industrial development

廃校を再生活用しているIID内に生まれたFab空間、PTA (Physical / Prototype Thinking Area) は、3Dプリンタを使って試行錯誤しながら、製品開発やものづくりを追求できる研究所のような場所。個人の作品づくりだけでなく、中小や個人の製造事業者とも連携し、産業を発信できるプラットフォームとなることをめざしている。また、CADなどのデジタルツールを使いこなせる人を育てるスクールなども開講中。

This Fab space evolved inside IID, a design institute run out of a formerly closed school. PTA stands for Physical / Prototype Thinking Area, a lab where innovators use 3D printers to develop new products through a process of trial and error. In addition to serving individuals, PTA is linking with the owners of small and medium manufacturing companies with the goal of becoming a platform for promoting the manufacturing industry. The institute also offers courses aimed at generating more expert users of CAD and other digital tools.



IKEJIRI INSTITUTE OF DESIGN



試作を繰り返して生まれた作品や製品を、アワードなどできちんと評価し、展示会などで発信・発表できる体制づくりにも取り組んでいます！

At PTA, makers develop products through many iterations of experimentation. The center is developing a system of awards and exhibits to help users display and promote their work.

企画室 館内企画担当
木下浩佑さん

Event Planner

Kosuke Kinoshita

東京都世田谷区池尻2-4-5 | TEL.03-5481-9011 | setagaya-school.net/ | 使用可能な機材：3Dプリンタ、3Dスキャナ、3Dモデラ、レーザーカッター

2-4-5 Ikejiri, Setagaya-ku, Tokyo | TEL.03-5481-9011 | setagaya-school.net/ | Available equipment: 3D printer, 3D scanner, 3D modeling software, laser cutter

はじめてのFab体験

木、アクリル、革、フェルト、そしてマカロンまで。P6の「TOKYO FABBERS」の文字は、様々な素材とデジタルファブリケーションツールを組み合わせで作ったものです。それぞれのツールを使って、どんなことができるの？ はじめてでも、うまくくれるの？ものづくりの現場を探るべく、Fab初体験の研究員がチャレンジしました。

Wood, acrylic, leather and . . . macaroons?! The letters spelling out "TOKYO FABBERS" on p.6 were made using a range of materials and digital fabrication tools. What can each tool do? Can even a beginner turn out a great product? Our research team explored the maker scene to answer these questions.

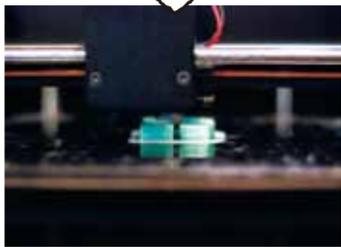
First Time Digital Fabrication

何もなかったところに、モノが生まれていく！
A new creation materializes!



3Dプリンター 3D Printer

タブレット端末にタッチペンで絵を描いたら、常駐の専門スタッフが3Dデータに変換してくれる。その際、高さなどを自由に設定できる。
After the customer uses a stylus to draw an image on a tablet, a staff member transforms it into 3D data. The customer can adjust size and other variables.



ヘッドの先端から出ているのは熱で溶かした樹脂。少しずつ層が積み重なっていき、だんだんと立体ができていく。約50分で成型完了。(F)
Light green liquid resin is extruded from the machine. Layers build up slowly into a 3D object that's complete in about 50 minutes. (F)

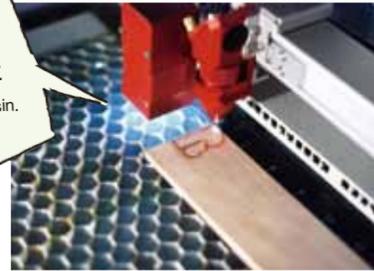
レーザーカッター Laser cutter

フード専用として運用されているレーザーカッターで、マカロンに刻印。ヘッドが高速で左右に動き、図柄を焼き付けていく。あっという間にできあがる。(F)
The laser cutter, used exclusively for food, imprints images on macaroons. The machine moves swiftly from left to right, burning a pattern into the surface. It's finished in a flash! (F)



2回、3回と照射を重ねて、刻印の色を濃くすることも
Passing the beam over the surface several times darkens the image.

木は焼き目が付き、樹脂だと削られた状態に
Lasers scorch wood and carve resin.



レーザーで木を切り出す。光が通ったところがカットされていく。カット面は焼かれたような濃茶になる。(H)
A laser is used to cut wood. The surfaces cut by the beam of light turn dark brown, as if they had been burned. (H)

写真などの画像データも刺繍にできるらしい
Even digital photographs and images can be turned into embroidery.

デジタル刺繍機 Digital embroidery machine

専用ソフトで縫い方や糸の密度を設定し、色を選んだら刺繍がスタート。手作業では難しい複雑な模様や曲線も表現することができる。(M)
After the customer determines a pattern, thread, and color using specialized software, embroidery begins. The tool can create complex designs and curved lines difficult with hand embroidery. (M)



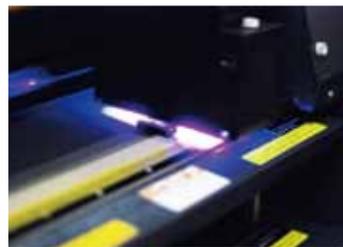
レーザーの照射量などを調整することで、彫刻加工も可能。革の表面を削ったような風合いになる。繊細な線も見事に再現。(H)
By adjusting the amount of light, the tool can also be used for engraving. The texture is similar to shaved wood, with even fine lines reproduced perfectly. (H)



輪郭がくっきりしていてキレイな仕上がり
A beautiful, cleanly contoured finish.

UVプリンター UV Printer

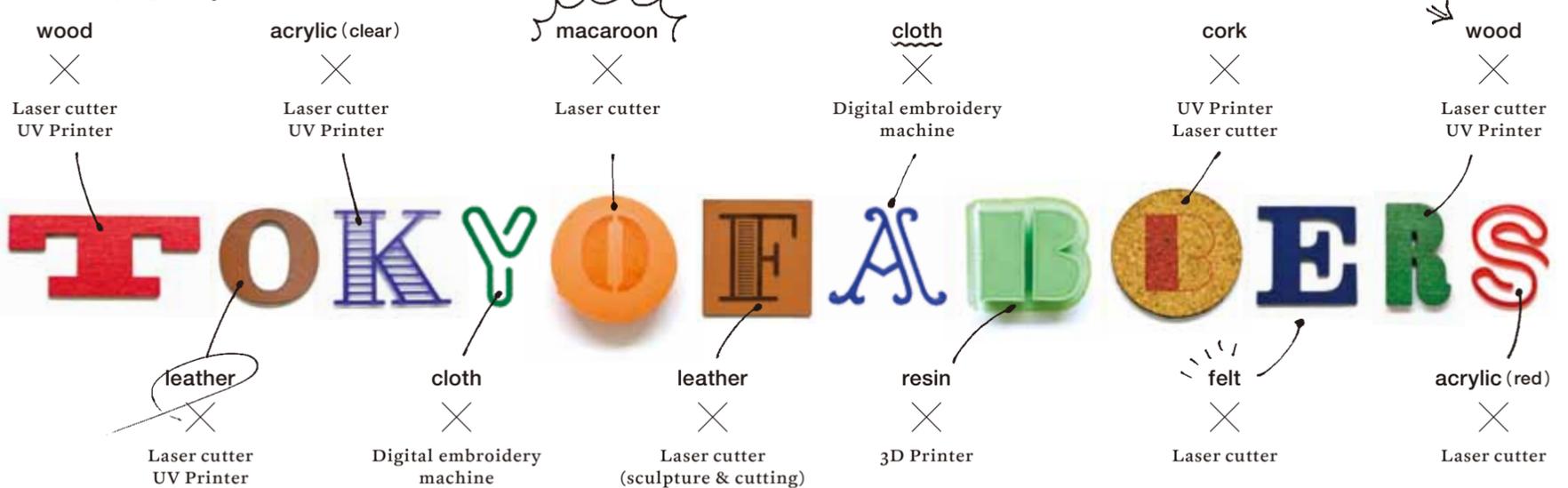
瞬時にインクを硬化するから、いろんな素材に印刷できる！
The instant ink-set process allows for printing on a wide variety of materials.



テストプリントした位置に合わせて素材を固定し、印刷開始。インクを吹き付けた直後に紫外線が照射され、インクが硬化する。
After a test run, the material is secured and printing begins. The ink spray is immediately followed by a UV ray that sets the ink.



できあがり。「T」は白いインクをベースに敷いたが、「R」はグリーンだけを乗せて木目が透けて見えるようにした。(H)
While we applied the white base coat to the T, we skipped that process and applied green ink directly to the R in order to let the wood grain show through. (H)



※P008-009製作・撮影協力：Makers' Base (M)、FabCafe Tokyo (F)、HappyPrinters HARAJUKU (H)
※P008-009 Fabrication and shooting cooperation : Makers' Base (M), FabCafe Tokyo (F), HappyPrinters HARAJUKU (H)

誰もが必要とするモノに取り入れれば、Fabはもっと身近な存在になれる

1990年代後半、マサチューセッツ工科大学メディアラボの教授が提唱した「デジタルツールを取り入れた個人でのものづくり＝パーソナルファブリケーション」の概念が、Fabの起源といわれている。その後、2000年代から、「つくる」「学ぶ」「共有する」というFabの3大スピリットを持つ場所が世界中で現れ、東京でもここ数年で多くのFab空間が誕生。池澤あやかさんもまた、Fabを使った作品をつくるク

リエイターのひとりだ。

「大学では、Webサイトなどプログラミングの技術を生かした作品づくりに没頭していました。卒業制作のインスタレーション作品（写真1）で、初めて作品制作にレーザーカッターを取り入れてみたんです。データで設計したものが、手に取れるモノとしてできあがる。Fabでつくった部品を組み立てて完成させることで、ソフトとハードが地続きになっている感動がありました」と池澤さんは語る。

その後、「シブカル祭。」(2)などの展示用の作品だけでなく、財布など身近な生活用品(3)にもFabを活用していった。

こうしてFabと深く付き合うようになったからこそ、見えてきた課題もある。

「展示で使う棚を、レーザーカッターで木を切り出してつくったのですが、重すぎて。もし日常的に使うとしたら、使い勝手が悪いと思います。手づくりしたものと、既製品との境目が見えた瞬間でした」。

Fabを取り入れたからといって、積年の知見や職人の技が詰まった商用製品と同じクオリティを生み出せるとは限らない。また、Fabを実践できる場所が多い東京ではFabにアクセスしやすいが、そういった場所がない地方の人や、デジタルデータ作成の知識や経験のない人には、浸透

度や親和性はまだまだ低い。そうした現状を踏まえて、池澤さんはFabの今後についてこう語る。

「最近では、3Dスキャナで顔型をスキャンし、3Dプリンターを使ってその場でチョコレート成型できるようになるなど、Fabはまだまだ進化の可能性を秘めています。チョコレートの例のように、初心者にもできる方法で、食べ物などの誰もが親しみやすいものに取り入れたなら、もっと身近な存在になれると思うんです」。

一部のクリエイターだけでなく、一般の人にも認知され始めてきたFab文化。今後の広がりや技術の進歩に期待したい。

池澤さんの作品 Works by Ayaka Ikezawa



大学の卒業制作としてつくった、センサーに指を置くことでメダカの動きをコントロールできるインタラクティブ作品「syncFish」。外装や内部構造の部品は、レーザーカッターを使って切り出した。

Users can control the movement of fish in this installation made using a laser cutter.



「シブカル祭。2014」では、「摩訶不思議なポケット」テーマにした作品「ポケットと私」を展示。トルソーの前に立つと、ポケットの上部に鑑賞者自身の姿が投影される。

The viewer's image is projected above a shirt pocket in *Me and the Pocket*, exhibited at Shibu Karu Festival 2014.



A Maker's Take on The Future of Fab

FABBERが見つめる Fabのミライ

Fabは、私たちの思考や暮らしにどんな変化をもたらすのでしょうか？

身につけるものや生活用品だけでなく、表現の手段としてもFabを取り入れているクリエイター、池澤あやかさんを客員研究員に招き、Fabのおもしろさや課題、可能性などを語っていただきました。

How will digital fabrication change the way we think and live?

Ayaka Ikezawa uses fab not just to make clothing, accessories and other everyday objects, but as a tool for creative expression.

We invited her to join us as a guest researcher and talk about the appeal, possibilities and challenges of fab.

Using fab to craft everyday objects can help make it more accessible

The fab movement got its start in the late 1990s, when a professor at MIT Media Lab came up with the concept of digitally enabled “personal fabrication.” By the 2000s, workshops embodying the three principles of fab—making, learning, and sharing—were springing up around the world. In the past few years numerous fab spaces have opened in Tokyo as well. Ayaka Ikezawa is one creative professional incorporating fab into her work.

“In university, I immersed myself in creat-

ing things like websites using computer programming skills. I experimented with a laser cutter for the first time in my graduation installation project (photo 1),” she says. “Something I’d designed with data emerged as an object I could hold in my hands. I was moved by the experience of joining hard and soft by manually assembling elements I’d created using fab.”

Since then Ikezawa has used fab not only in art pieces exhibited at venues such as the Shibu Karu Festival in Shibuya (2), but also to create wallets and other everyday objects (3). Her extensive use of digital tools has opened her eyes to some of their challenges.

“I made shelving to use at an exhibit by cutting wood with a laser cutter, but it’s too heavy. I don’t think it would be convenient for every-day use. That was a moment when the boundary between hand-crafted and ready-made goods became clear to me,” she says.

Using fab doesn’t guarantee products will have the same level of quality as commercial goods made by skilled craftsmen building on years of accumulated knowledge. And while it’s easy to find places to try out fab in Tokyo, the movement has yet to take root with people living in less central regions or lacking experience with digital creation. Ikezawa takes those points into

consideration when she thinks about fab’s future.

“Fab still has a lot of hidden potential to evolve, like we see with the recent use of 3D scanners to scan people’s faces and then reproduce them in chocolate right there using 3D printers,” she says. “I think that’s an example of how, by using a technique that even beginners can master and a familiar material like food, people can get more comfortable with fab.”

Fab culture is starting to spread from a small group of creative professionals to the general public. In the coming years, it’s likely to keep on evolving and gaining popularity in ways we can’t imagine.



愛用の財布にレーザー彫刻をしたり、デジタル刺繍機とレーザーカッターを使ってワッペンを制作したり。池澤さんは身の回りのモノや小物にもFabを取り入れている。

A laser engraved wallet and digitally embroidered badges.

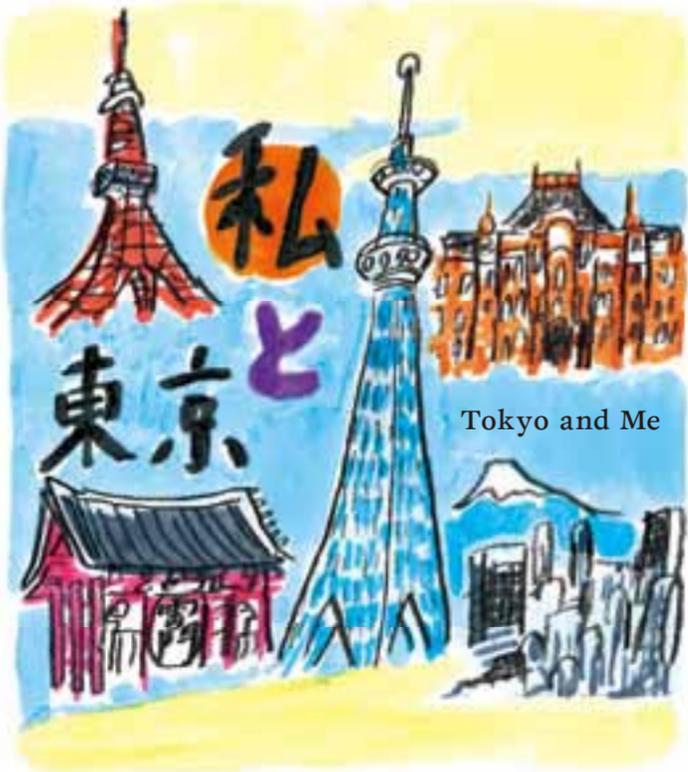
Ayaka Ikezawa

池澤あやか
Ayaka Ikezawa

女優・WEBデベロッパー。2006年、第6回東宝シンデレラ審査員特別賞受賞。2014年、慶應義塾大学環境情報学部を卒業。映画やドラマなどに出演する傍ら、ITスキルを生かしたクリエイターとしても活躍中。

Actress and web developer Ayaka Ikezawa is winner of the 6th Toho Cinderella Judges' Special Award, in 2006, and a 2014 graduate of Keio University's Faculty of Environment and Information Studies. In addition to appearing in films and television dramas she is active as a digital creator.





堀道広
Michihiro Hori

うるし漫画家。1975年富山生まれ。漆による陶磁器修理の教室「金継ぎ部」も主宰。著書に『青春うるはし!うるし部』『耳かき仕事人サミュエル』『パンの漫画』など。

Born in 1975 in Toyama, he supervises a class on ceramic and porcelain repair using *urushi* (Japanese lacquer) entitled "Kintsugi Club," in addition to his work as an *urushi* comics artist. His works include and *Seishun Uruwashii! Urushibu*, *The Earpicker Samuel* and *The Bread Comic*.



Tokyo Local

- Yusuke Nagai
- Annemarie Luck
- Hiroshi Eguchi
- Satoru Yamashita
- Takahiro Kaneshima
- Hiroshi Kozawa
- Yayoi Arimoto

私にとって東京文化とは、 Tokyo culture to me is...

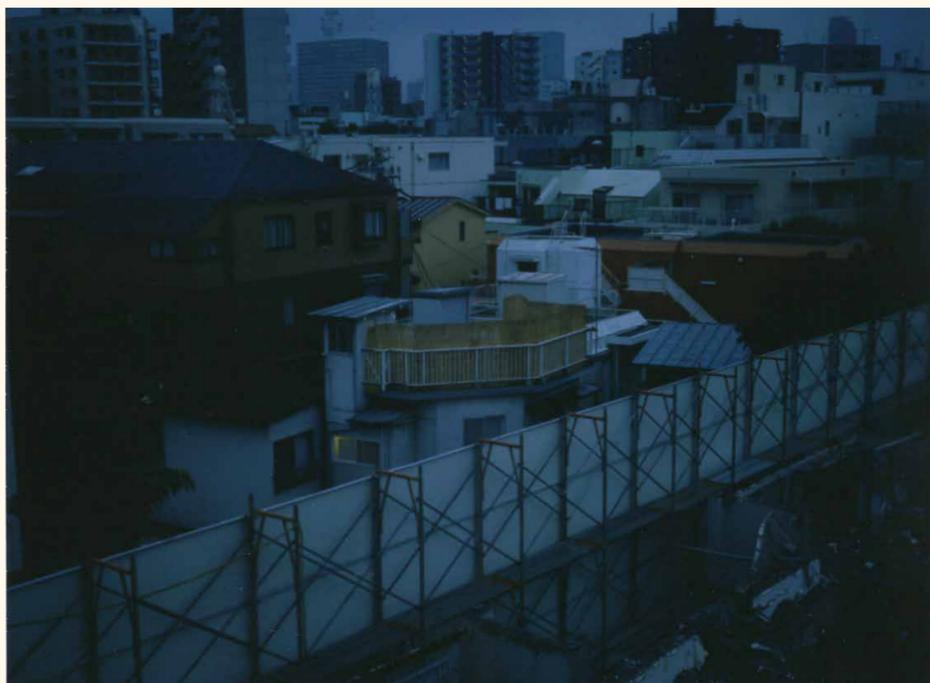
ここにしかない自然と情緒、人の営みによって、根づいた文化がある。

その文化に向ける眼差しもまた、“東京ローカル”のひとつひらだ。「あなたにとって、東京文化とはなんですか？」自身の活動を通して、様々な土地の文化を感じてきた7名を客員研究員にお招きし、発表してもらいました。

There is a culture rooted in the nature, spirit and human activity that exist nowhere but here. And the ways of looking at this culture are one more aspect of “local Tokyo.” “What is Tokyo culture to you?” We invited seven guest researchers who have experienced various local cultures through their own activities, and asked them to present their views.

Presentation

「土地の記憶の姿」です。
...the land's memory



自分の拠点である原宿の地域一体が、太古の昔は水の底にあったと聞いて、腑に落ちることがあった。変化がめまぐるしいこの場所に、いつだって途切れない人の流れを生み出す源は一体何なのかと、常々疑問に思っていたからだ。かつてそこにあった水の流れが人の流れを呼び起こし、そこに「文化」が立ち上る。東京の複雑な地形はそのまま、東京文化の多様さにつながっている。僕は知らず知らずのうちに土地が持つ遙か何千年も前の記憶を享受し、共有している。一見猥雑に映るこの街を、淡い光に包まれる彼は誰時（かはたれどき）に眺めてみて欲しい。そこに広がる美しい風景は、本質的には何も変わることなくこれまでも、そしてこれからもずっとそこに在るのだ。

I'm based in Harajuku, and when I heard that the whole area was under water in ancient times, it made sense to me because I always wondered what gives rise to the ceaseless flow of people in such a place where it's constantly changing. The ancient stream of water evoked the stream of people, and in that place “culture” came into being. Tokyo's complex topography is directly linked to the diversity of Tokyo's culture. Without realizing it, we have been absorbing and sharing the land's millennia-old memory. This city may look chaotic at first glance, but try looking at it in the faint light of dawn. That beautiful landscape will never change in essence, and will continue to exist perpetually.



原宿にあるフリースペース「VACANT」主宰。09年「第一回 littlemoreBCCKS 写真集公募展」大賞受賞。写真集「varnish and mortar」（リトルモア）を出版。同年「VACANT」を立ち上げる。

Director of VACANT, a free space in Harajuku. In '09, won the grand prize in the “First littlemoreBCCKS Open Exhibition of Photo Books.” Published *varnish and mortar* (littlemore). Started VACANT in the same year.



「重構造、レイヤード」です。

...heavy structure, layered



Annemarie Luck
アソマリー ラック

2013年、南アフリカのケープタウンから東京に来た、タイムアウト東京のエディター。仕事をしていないときは海に行ったり、ダンスをしたり、次の島旅行の計画を立てたりする。

Annemarie Luck followed her heart from Cape Town to Tokyo in 2013 and now works as an editor for Time Out Tokyo. When she's not writing, she can be found on the beach, in dance studios, or drinking tea while plotting her next island holiday.

それを例えるとすれば、美しい桜の木々やファッション天国を一気に駆け抜ける、大きな波に乗り、難解なパズルを解いていく、スロープを滑り降りていくような感覚です。でも、中でもエディターとして、東京のカルチャーを見て、体感し、それを自分の視点から情報を発信できることは、とてもラッキーだと感じています。そうすることで自然とパズルのピースも組み合わさっていきます。

東京の電車はよっぽどの台風や吹雪じゃない限り、時間通りに運行されています。また、どんな重役やVIPでも、丁寧に辞儀をして名刺を渡し、「よろしくお願いします」と言ってくれます。このような日本人の礼儀正しさは、外国人の行動にさえ影響を与えるほどです。体格のいい欧米人でも、店員やクライアントに礼儀正しくお辞儀をするところを見ると、この文化に深く根づいたしきたりの影響力の大きさを感ずります。

しかし、東京の文化は、それだけではありません。私が、大波に乗れた時、だいたい東京で出会った人たちのクリエイティビティによって支えられています。たまに波が無い日もありますが、そういう時は、一人でも影響を与えてくれる人に会うだけで、なんでもできるような気持ちになります。

Of designers, of chefs, of my fellow editors. It's reflected in the fact that trains are only late if there's a typhoon or snowstorm on the go (and even then, many still run on time). And in the way even a VIP will hand me their business card with a bow and say 'Yoroshiku onegaishimasu' ('Please be good to me'). I love that this respectful aspect of Japanese culture rubs off on foreigners' behaviour, as opposed to the other way around. When you see a burly Westerner bowing to a shop owner or colleague, it proves how powerful a deeply ingrained tradition can be. But there is a lot more to the culture than pride, respect and tradition. When I'm riding the crest of the wave, I'm carried by the creative spirit of people I meet here. There may be lulls where I feel like a stranger at sea, but it only takes meeting one inspired person to make me feel like anything's possible.

「溢れゆく物から生まれる隙間」です。

...the gaps born of an abundance of things

東京は物に溢れていて、なんでも揃う街が前提としてあるんですけど、そのぶん、物と物との合間、隙間というもの日々生まれています。

例えばAmazonがあるからnomazon(※)が生まれ、『東京国際ブックフェア』という総合的なブックフェアが存在するから、アートに特化した『THE TOKYO ART BOOK FAIR』が成立できる。ユトレヒトを続けられたのも、近くに青山ブックセンターやクレヨンハウス、山陽堂書店といった素晴らしい書店が近所にあるからこそだと思えます。

こんな風に物の合間を見つけて、そこに小さな可能性を見つけて何かを表現しても、東京には受け入れてくれる人がちゃんという。そういう規模感を持つ街が東京の文化だと思います。

ところでみなさんは「東京の名産品は？」と聞かれたら、なんて答えますか？ 地方に行けば思いつくのに、僕は東京と言われると言い濁していました。

東京の名産品。これから先にそう言えるようなプロジェクト『TOKYO L』が浅草で立ち上がりました。浅草は140年以上の歴史をもつ、靴と皮革製品のものづくりの街。『TOKYO L』は、この地域に点在するメーカーや問屋さんと、建築家やデザイナーなど、いろんな分野で活動する人たちが共同で皮革製品の製品化をしようというプロジェクトです。僕は皮の力を使って、今まで見えていなかったもの、見えるようにしたいと思っています。地域に特定される資源を使いながら新しいものづくりをする。その見せ方を考える。こういう動きができるのもまた、東京らしいなと思います。

For example, nomazon (*) came about because there is Amazon, and THE TOKYO ART BOOK FAIR came into existence because of the existence of the Tokyo International Book Fair, the largest book fair in Japan. And I think the reason that I've been able to keep UTRECHT going is that the Aoyama Book Center, Crayon House and Sanyodo Bookshop are right nearby. In this way, when you find spaces between things, look for small possibilities in those spaces and express something, there will always be someone in Tokyo who will accept it. A city with this feeling of scale—to me, that's Tokyo culture.

Tokyo specialty products. TOKYO L, a project that will be able to use that phrase one day, has been launched in Asakusa. An area with a 140-plus-year history, Asakusa is a town of shoe and leather goods makers. In TOKYO L, the makers and wholesalers dotting the area will work in cooperation with people in fields like architecture and design and attempt to make leather goods into commercial products. While using resources specific to the area, they will carry out a new kind of production. I think that this, too, is something very much in the style of Tokyo.



Hinochi Eguchi
江口宏志

セレクトショップUTRECHT代表。THE TOKYO ART BOOK FAIR共同ディレクター。Amazonにないアイテムだけの仮想ブックショップnomazonなど、新しい形の本との関わり方を次々生み出している(※)。

Director of the select shop UTRECHT. Co-director of THE TOKYO ART BOOK FAIR. Continually creates new ways of relating to books, including the virtual bookshop nomazon, which offers only items that are not found on Amazon. (*)

「地域が育む生活スタイル」です。

...lifestyle region nurture

自分の人生を振り返ると、年代とともに遊ぶ場所が変遷している。幼少期に連れられた、色濃い賑わいと雑踏の浅草や上野アメ横の風景。漱石、鴎外の住処、正岡子規の墓や室生犀星の校歌など、教科書の題材と隣合わせの谷根千が遊び場だった小学校時代。銀座、日比谷、有楽町での銀ブラと映画の街に毎日通う中学時代。高校では、猿轡で混沌とした新宿歌舞伎町と池袋北口の盛り場が遊び場に代わり、流行発信地の渋谷、原宿、代官山、六本木が大学時代の遊びの拠点となった。社会人になると、四谷、荒木町の作家や音楽業界などの文化人のたまり場に顔を出すようになり、そしてここ20年は、青山、麻布、神宮前が生活のすべてとなった。

私の見た東京の遊び場は、いまでも地域ごとに江戸期からの独特の文化を持ち続けている。地域文化の普遍性と遊び場の多様性により、住処と遊び場を変えれば、出会う人も人生も変えることができる生活スタイルが、私にとっての東京文化の魅力である。



Satoru Yamashita
山下 悟

東京都生まれ。1997年に雑誌「+81」創刊。以降、ギャラリーの運営など、デザイン・アートの領域で活動。現在、日米で4会社の経営と雑誌編集長、NYギャラリー・キュレーターを兼務している。

Born in Tokyo. In 1997, launched the magazine "+81." Currently he is the manager of four companies in Japan and in the United States, editor-in-chief of a magazine, and curator of a gallery in New York.

Looking back at my life, I realize that my playgrounds have changed with each era. I see the bustling crowds of Asakusa and Ueno Ameyoko, where I was taken as a young child. When I was in elementary school I played in Yanesen, which was connected to the subjects of my textbooks – the homes of Soseki and Ogai, the grave of Shiki Masaoka, the school song by Saisei Muro, and so on. In junior high school I went every day to walk around and see movies in Ginza, Hibiya and Yurakucho. In high school my hangouts were the chaotic and disordered Shinjuku Kabukicho and Ikebukuro North Exit amusement area, and when I was in university I went out in Shibuya, Harajuku, Daikanyama and Roppongi – the places where trends got started. After I graduated and starting working, I began going to places in Yotsuya and Arakicho frequented by artists and people in the music industry. And for the past 20 years my life has revolved around Aoyama, Azabu and Jingumae.

The Tokyo playgrounds that I've spent time in retain the particular culture that has been a part of each area since the Edo period. Because of the universality of local culture and the diversity of amusement areas, you can meet different people and change your life when you move or change to a different hangout – and to me, this lifestyle is the appeal of Tokyo culture.



「パラレルワールド」です。

...a parallel world

時代やジャンルを軽やかに飛び越えながら多様な価値観が並列に存在し、そういった「もの」や「こと」に常に出合える、それが東京文化の魅力そのものだと思います。

近代的な大型の高層ビルの隣に、ひっそりと佇む神社。最先端のファッションブランドが軒を連ねるエリアの一角には、古くから商いを続ける骨董屋やギャラリー、そして居酒屋。その刺激を受けながら生み出され、また紹介されるアートも多種多様です。

様々なアートが存在する東京で、どこに行けばいいかわからない、アートは難しくて敷居が高そうだが、でも生活の中に取り入れてみたい、美術館や劇場などで鑑賞するだけでなく所有したい、そういった方々の思いにこたえるべく、『アートフェア東京』などのイベントを通じながら、それらとの接点をつくり、魅力を伝えています。

そして、居心地のいい距離感でアートと付き合えるようになれば、パラレルワールドな東京がさらに楽しくなるのではないのでしょうか。



Takahiro
Kaneshima
金島 隆弘

FEC代表 兼「アートフェア東京」プログラム・ディレクター。アーティストの制作支援や交流事業、東アジアの現代アートの調査研究などを手掛けるほか、各国で展覧会も企画。

Director of FEC and program director of Art Fair Tokyo. In addition to his involvement in support for artists' productions and art exchange programs, and research on contemporary East Asian art, he plans exhibitions in a number of countries.

A wide range of values existing in parallel while easily transcending time periods and genres – and the possibility of encountering these “things” and “ideas” at any time – are the essence of Tokyo culture's appeal. The art that is created and presented as a result of this stimulation is wide-ranging as well. In this city with its artistic diversity, through my involvement with events like Art Fair Tokyo, I create points of connection with this art and let people know about its attractions. It seems to me that if you develop the ability to encounter art and interact with it at a comfortable distance, the parallel world of Tokyo will be even more enjoyable.

「古いものも大事にする目線」です。

...a point of view that values the old as well as the new

東京は、実は意外と骨董市の多い街です。

世界はおろか、日本の地方都市を見ても、こんなに骨董市が開かれている街に出合ったことはありません。

常に新しいものが生まれ続ける街なのに、同じくらい古いものも集まっています。なんだかとても新鮮です。

「古いものを、新しい目線で使い回す」という感覚が私には、洒落ていると感じます。

また、それを求めて日曜の早朝からたくさんの人が集まっているのも面白いところ。

既製品とは違う一点モノの良さを、日常にさりりと取り入れるセンスもまた東京文化のひとつではないかと思っています。

Tokyo is a town with many antique markets as it is unexpected in fact. In regional areas in Japan, not to mention in other countries, I've never been in a city where so many antique markets are held. In Tokyo there are new things coming out constantly, but at the same time just as many old things are brought together – and for some reason that seems very fresh. To me, the feeling for using old things from a new point of view is sophisticated. It's also interesting that a lot of people go to antique markets early on Sunday morning to find that. The taste for smoothly incorporating into daily life the charms of one-of-a-kind things that are different from ready-made things – it seems to me that this is one aspect of Tokyo culture.



「訪れた人が感じることそのもの」です。

...things that are sensed by visitors

観光という側面から見ると、文化にはふたつの種類があるように思います。消費される文化と、消費されない文化です。例えば観光客誘致のために流行りの施設や名物などを発信しても、一時的なものでことごとく消費されてしまいます。一方で観光地の魅力が詰まっている浅草には、大提灯やお寺などの象徴的なアイコンがあり、いつまでも消費されません。

しかしこれらは、一度見たら満足。実は東京に何度も訪れる人は、こういったアイコン以上に、そこで営まれるローカルな生活を面白がっているのです。私が街歩きに外国人を連れ出すと、彼らは電柱や、ボロボロの長屋の隙間にいる猫などをこぞって撮影します。これらもまた、消費されずに残っている東京文化の一部です。彼らを見ていると、文化とは作られたコンテンツだけではなく、訪れる人が自然に見つけるものだということが気付きます。街並や音楽、プロダクトなど、この土地で生まれるものすべての根底にあるのは、普通の人の普通の暮らし。住み慣れた私たちからは見えない、そんな東京文化を教えてくれるのは、他ならぬ訪れる人の視点なのだと思います。



Hiroshi Kozawa
小澤 弘規

有限会社万両代表取締役。日本で12店舗のゲストハウスを運営する。2013年、東京拠点のゲストハウス/ホステル9店舗で任意団体「東京ホステルネットワーク」を設立し代表に。

President of Manryo Limited. Operates 12 guest houses in Japan. In 2013, he founded and became director of the private organization “Tokyo Hostel Network,” with nine guest houses/hostels located in Tokyo.

I think that, from the perspective of tourism, some forms of culture are consumed and some are not. If you disseminate trends in order to attract tourists, those trends will be consumed, but icons like the giant lantern and temple in Asakusa will never be consumed.

But if people see those things once, they're satisfied. In fact, people who visit Tokyo a number of times take an interest in the local lifestyle. When I show people from overseas around the city, they take photos of things like telephone poles, and cats in the spaces between old row houses. These things are also part of the Tokyo culture that is not consumed. In my view, visitors' perspectives are what teach us about Tokyo culture that we who live here don't see.



Yayoi Arimoto
在野 彌生

外資系航空会社の客室乗務員を経て、2006年よりフリーランスフォトグラファーに。国内外を飛び回りながら、雑誌、カタログ、広告などの媒体のほか、自身の作品も撮り続けている。

Arimoto became a freelance photographer in 2006. Traveling around Japan and other countries, she continues to create her own photo works in addition to her works for magazines, catalogues, advertisements and other media.



ブンプロ 掲示板

研究所内の掲示板には、気になる情報がもりだくさん。
ブンプロが実施するプログラムなどなど、ぜひチェックしてみてください!

The research lab bulletin board is packed with important information.
Check for updates on BUNPRO programs and all sorts of other things!

ブンプロ主催のプロジェクトなどの詳細は、公式ウェブサイトから。
SNSでも旬な話題を提供しています!

Find out here about programs and details of projects presented by BUNPRO.
Fun topics are also posted on Facebook and Twitter!

www.bh-project.jp
www.bh-project.jp/en

東京文化発信プロジェクト
@tokyobunka



集中講座

「アート活動を“続ける”ための組織について考える」

受講レポート

Report on the Intensive Lecture Series “Organizing to Keep Art Activities Going”

「人」と「お金」から アートプロジェクトを考える

第1回目の「アートプロジェクトを“伝える”広報&ツールを考える」に続き、第2回目の集中講座「アート活動を“続ける”ための組織について考える」が開催されました。講師は、菊池宏子さん（米国・日本クリエイティブ・エコロジー代表）と山内真理さん（公認会計士／税理士 Arts and Law 代表理事）のお二人。受講生にはアートプロジェクト運営団体の人や、これからアートプロジェクトに携わりたいと思っている人たちが集まり、講座のテーマであるアートプロジェクトを続けるための方法を「人」と「お金」の視点から考えていきました。

講座のはじめに、NPO法人と一般法人の違いや「非営利」、「公益」といった言葉の整理、近年多く選ばれている組織形態の傾向などについてレクチャーがありました。

組織の運営に欠かせない資金集めについて話がおよぶと、講師の菊池さ

アートプロジェクトを続けていくために必要なことは？

「思考と技術と対話の学校」の集中講座を研究員が受講してきました!

What is needed to keep an art project going?

An Intensive Lecture Series researcher reports on “Thought, Skill and Dialogue.”

Official Web Site tarl.jp

んは「資金集めはプロジェクトの目的をかなえるためのもの。まずはスタッフ間できちんと目的を共有することが大切」と話していました。

組織の情報開示について、講師の山内さんは、業務量が多く手が回らないなどの理由で、会計情報を開示する団体が少ないという現状に触れながら、「会計は、事実を貨幣的に表現するための言語。事業報告や決算書は、組織内外とのコミュニケーションツール。だから、会計情報の開示は大切なんです」と言及。また、菊池さんは「自分たちがどういう指針をもって行動しているか」を外に伝えることが、人と人との関わり合いの仕組みの強化につながる」とコミュニティエンゲージメントの重要性についても話していました。

講座では一貫して、組織に必要不可欠な「人」と「お金」の切っても切り離せない関係が様々な角度から語られましたが、中でも重要なのは、「人とお金の両方から、常に横断的に考えること」ということでした。

TARLはアートプロジェクトを担うすべての人のためのラボとして、集中講座以外にも様々なプログラムを展開しています。詳しくは公式ウェブサイトをチェックしてみてください。

Thinking of art projects in terms of “people” and “money.”

Following the first series of lectures on “Public Relations and Tools for the Communicating of Art Projects,” the second series focused on “Organizing to Keep Art Activities Going.” The two lecturers were Hiroko Kikuchi, Founding Principal of the U.S.-Japan Creative Ecology, and Mari Yamauchi, a certified public accountant, licensed tax accountant, and Representative Director of the NPO Arts and Law. Participants included those from groups already operating projects, and others planning to become involved in project management. Together they considered how to keep art projects going from the viewpoints of “people” and “money.”

The lectures began with the differences between “not for profit” and “for public” organizations, definitions of these terms, and what sort of management structure organizations have tended to choose in recent years.

Fund-raising is vital to the management of an arts organization. “Fund-raising is

something that allows a project to accomplish its purposes,” said Kikuchi. “It is important first that all staff share an awareness of what these purposes are.”

Yamauchi talked about disclosure by arts organizations, saying that because this involves so much work many groups now do not make their accounts public. “Accounts are an expression of monetary reality,” she said. “Operations and financial report are a communicative tool both within an organization and without, so disclosure of accounts information is very important.”

Kikuchi emphasized the importance of community engagement. “By communicating to people outside the organization the guidelines on which you are acting, you strengthen the structure of people’s involvement.”

As a general theme, the lectures covered the inextricable relationship of the two vital elements of “people” and “money” from a number of different angles. The most important thing, it was said, is the need to think laterally across both the questions of people and of money.

As a laboratory for the benefit of all who are involved in art projects, TARL offers a variety of programs along with this Intensive Lecture Series. For further information, consult our website.



「思考と技術と対話の学校」とは？

What is “Thought, Skill and Dialogue”?

ブンプロ事業の東京アートポイント計画の一環としてTokyo Art Research Lab (TARL) が展開する、アートプロジェクトの現場を担う人を育てるためのスクール

A school dedicated to the fostering of human resources actively involved in art projects, run by the Tokyo Art Research Lab (TARL) as part of BUNPRO’s Tokyo Artpoint Project.

思考と技術と
対話の学校

ブンプロのライブな情報をオンエア!

Live BUNPRO information is on-air now!

渡辺 祐
Tasuku
Watanabe

J-WAVE (81.3FM)

『BUN-PRO TOKYO CREATIVE FILE』

オンエア日時: 毎週土曜日11時35分~11時45分
(ワイド番組「RADIO DONUTS」内)

On Air: Saturdays, 11:35-11:45

(A segment of the "RADIO DONUTS" show)

山田玲奈
Rena
Yamada

www.j-wave.co.jp/original/creativefile/

『TOKYO PAPER for Culture』のバックナンバー、公開中

Back issues of "TOKYO PAPER for Culture" are out now!

「東京の文化を知る、深める、高める」をコンセプトに、
2013年から東京文化発信プロジェクトが
年4回のペースで発行している『TOKYO PAPER for Culture』。
バックナンバーを公式ウェブサイト上でご覧いただけます。

"TOKYO PAPER for Culture" is issued four times a year
with the aim of knowing,
deepening and enhancing Tokyo culture.
Back issues can be viewed on the official website.

第六号
トーキョー
スポーティー

テーマは『惑星で会いましょう』

第7回恵比寿映像祭

Festival Theme: "See You on the Planet"

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2015



左/バヴェウ・アルトハメル(共同作業) 2009年 [参考図版] Courtesy the artist, Foksal Gallery Foundation, Warsaw, Open Art Projects, Warsaw and neugerriemschneider, Berlin
右/ホンマタカシ「Trails」(2010年)より [参考図版]

映像とアートの祭典、「恵比寿映像祭」。7回目を迎える今回は、メイン会場である東京都写真美術館の改修工事による休館を機に、恵比寿に点在する複数の会場で開催される。総合テーマは「惑星で会いましょう」。展示、上映、ライブ・イベント、トーク・セッションなど多彩なプログラムを展開する。映像をとおして「視点を変える」ことを試みながら、未知の惑星を旅するように、複層化する世界に向き合い再発見する手掛かりを探る。参加作家は、ポーランドのバヴェウ・アルトハメルや実験映像の巨匠ケン・ジェイコブス、写真家のホンマタカシのほか、1980年代生まれの若手アーティストなど、様々な国や年代のアーティストが多数参加する。

With its usual venue, the Tokyo Metropolitan Museum of Photography, undergoing renovations, The 7th Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions will feature exhibitions, screening, live events and talks in different locations around Yebisu under the theme "See You on the Planet." Trying to change perspective through images, as if on a tour of an unknown planet, we will look for clues to the rediscovery of an increasingly multi-layered world. Participants will include artists of different ages and nationalities, young artists born in the 1980s, and feature Pawel Althamer of Poland, the experimental film master Ken Jacobs and photographer Homma Takashi.

会期: 平成27(2015)年2月27日(金)~3月8日(日) [10日間/会期中無休] 時間: 10:00-20:00 (最終日は18:00まで) 会場: ザ・ガーデンホール(展示、ラウンジトーク)、ザ・ガーデンルーム(ライブ、レクチャー)、日仏会館ホール・ギャラリー(上映、展示、シンポジウム)、恵比寿ガーデンプレイスセンター広場(オフサイト展示)、恵比寿地域文化施設およびギャラリー(地域連携プログラム)ほか 料金: 入場無料 ※定員制の上映プログラム、イベント等については有料 問い合わせ: 03-3280-0099 主催: 東京都/東京都写真美術館・東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)/日本経済新聞社 共催: サッポロ不動産開発株式会社/公益財団法人日仏会館

Dates: Feb. 27 (Fri) - Mar. 8 (Sun), 2015 (10 days continuous) Time: 10:00 - 20:00 (last day to 18:00) Venues: The Garden Hall (exhibitions, lounge talk), The Garden Room (live, lectures); Auditorium and Gallery of La Maison Franco-Japonaise, (screenings, exhibitions, symposiums); Center Square of Yebisu Garden Place (off-site projects); Related facilities and galleries (partnership programs); others Admission: Free (Admission fee for membership program screenings and events.) Information: 03-3280-0099 Organizers: Tokyo Metropolitan Government, Tokyo Metropolitan Museum of Photography/ Tokyo Culture Creation Project (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Nikkei Inc. Co-organizers: Sapporo Real Estate co., Ltd., La Maison Franco-Japonaise

三鷹の町がアートで染まる

TERATOTERA 祭り2014

Filling Mitaka with Art

TERATOTERA Festival 2014



Photo: Hako Hosokawa

JR中央線高円寺駅から国分寺駅までの区間を中心としたエリアからアートを発信している、地域密着型アートプロジェクト「TERATOTERA」。今年度は、出会う、遭遇するという意味を持つ「邂逅 - encounter -」をテーマに掲げている。そしてこの冬、3日間にわたり開催される「TERATOTERA祭り2014」では、置かれた状況やその時々のお会いに、臨機応変に反応して作品をつくり上げる作家たちが集結。武蔵野芸能劇場や三鷹駅北口周辺の空き店舗などで、和田昌宏、東野哲史、泉太郎、太田裕司などによる、インスタレーションや映像などの作品が展開される。さらには、現代アーティストによる映像作品の上映会、音楽ライブ、演劇等の公演など、ジャンルや世代を超えた多彩なプログラムが開催される。

TERATOTERA is a community-centric project that showcases art in the area between Koenji and Kokubunji on the JR Chuo Line. TERATOTERA's theme for this year is "encounters: the things people happen upon and meet by chance."

This winter, the three-day TERATOTERA Festival 2014 will unite artists to create captivating works by responding flexibly to their circumstances and chance encounters. At the Musashino Entertainment Theater and vacant stores around the north exit of Mitaka Station, Masahiro Wada, Tetsushi Higashino, Taro Izumi, Yuji Ota, and others will exhibit installations, videos, and more. Overall, the diverse, cross-genre, and multigenerational programs will include everything from screenings of videos by contemporary artists to performances of music and theater.

会期: 平成27(2015)年2月20日(金)~22日(日) [3日間] 会場: 武蔵野芸能劇場(小ホール、小劇場)、東海大学望星学塾柔道場ほか三鷹駅北口周辺各所 料金: プログラムにより異なる 問い合わせ: 090-4737-4798 主催: 東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人Ongoing

Dates: Feb. 20 (Fri) - 22 (Sun), 2015 (three days) Venues: Musashino Entertainment Theater (small hall and small theater), Tokai University Bosei Gakujuku Dojo, and locations around the north exit of Mitaka Station Admission: Varies by program Information: 090-4737-4798 Organizers: Tokyo Metropolitan Government, Tokyo Culture Creation Project (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Ongoing (General Incorporated Association)

東京文化発信プロジェクトとは

About Tokyo Culture Creation Project

東京文化発信プロジェクトは、「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、東京都と東京都歴史文化財団が、芸術文化団体やアートNPO等と協力して実施している事業です。多くの人々が文化に主体的に関わる環境を整えるとともに、フェスティバルをはじめ多彩なプログラムを通じて、新たな東京文化を創造し、世界に発信していきます。

www.bh-project.jp

Tokyo Culture Creation Project, organized by the Tokyo Metropolitan Government and the Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture in cooperation with arts organizations and NPOs, aims to establish Tokyo as a city of global cultural creativity. The project facilitates involvement of a larger number of people in creation of new culture as well as it creates and globally disseminates new Tokyo culture through organizing international festivals and other diverse events. www.bh-project.jp/en

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室

〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階 tel: 03-5638-8805 | fax: 03-5638-8811

研究成果

研究員が今号を振り返ります!

Results

In this issue the researchers look back.

移住してもなお、高知に東京文化のあるべき姿を見る安藤桃子さんの東京LOVEに大いに感動!(森隆) / 鉛色の空は、冬の新潟名物。18歳までこの空の下で育った私にとって、高層ビルの輪郭さえシャキッと見えるこの街の冬晴れは、東京ローカル。(水島) / 東京文化と言えるかどうかかわからないのですが、様々な事象に対してカテゴリー化されることが多いと感じます。(漆原) / 「東京文化」と聞いて連想することは本当に十人十色。私の中の東京文化は何色だろう...と改めて考えさせられました。(仲野)

Though she has moved from Tokyo and looks at the shape of Tokyo culture and how it should be from Kochi, Momoko Ando's Tokyo Love is very moving. (Mori Ryu) / Under a leaden sky, the sights of Niigata in winter. Having grown up under those skies until I was 18, I see the crisp, sharp outlines of the skyscrapers on a clear winter's day here making this a Tokyo local. (Mizushima) / I don't know if you can call this Tokyo culture or not, but I feel there is a great categorization of different kinds of event here. (Urushihara) / The colors people are reminded of when they hear "Tokyo culture" are different for every person. I wonder what color Tokyo culture is for me? I've been forced to think about that again. (Nakano)



Column

Where the master does his & her work

あのひとの現場

千葉努・れみの
クリエイティブスペースTsutomu & Remi
Creative Space

『kichi』は、私たちが伊豆大島に移住した翌々年の2012年に誕生しました。きっかけは、建築家の友達が宇都宮の空き店舗の目立つ商店街に作ったコミュニティスペース。子供から大人まで出入りし、みんなが楽しそうにしている姿を見て「大島にもこんな場所があったら」と思ったのです。その後私たちが発行している大島のフリーペーパー『12class』の取材で、閉店してしまったジャズ喫茶のオーナーの息子さんに会い、縁あってその跡地が借りられることになりました。それが『kichi』のルーツです。最初は、「人が集うところにお茶を」と、週末だけカフェをオープン。少しずつクラフト市などの小さなイベントも始めました。『kichi』は、私たちにとても訪れる人にとっても居心地の良い空間を作るための現場です。本を置いたりお菓子を作ったり、訪れる人と話したりしているうちに会

千葉努 / Tsutomu Chiba
千葉れみ / Remi Chiba

神奈川県出身(努さん)。伊豆大島出身(れみさん)。結婚を機に、横浜でデザイン事務所「トウオンデザイン」を設立。2010年に伊豆大島に移住し、クリエイティブスペース『kichi』をオープン。http://kichi.to-on.info/

いが広がり、最近ではライブや個展などの開催も徐々に増えていきました。

港の目の前にあることから、『kichi』には“都会と自然を結ぶ中継基地”という意味とともに“島内外を繋ぐ場所”という意味も込めています。オープン当初はほぼ島民の方が占めていましたが、3年が経ち、今や島外の方も同じくらい『kichi』に関わってくれるようになりました。さらに今年からは東京アートポイント計画(ブンプロ)のひとつとして、『kichi』の新しいプロジェクト『三原色[ミハライロ]』がスタート。ここでは大島と、島外の方をデザインやアートで繋ぐという面白い試みを始めています。東京に近い分、都心に目を向けがちな島民の方が多い中、島外の方々は島外の良いところを見つけてくれるのです。そういう意味でも、島内外の人々が交流することには大きな意味があると思っています。自然豊かで食べ物おいしく、都心からも近いこの島を「楽しみたい」という仲間をもっと増やして、これからも大島の良いところを発信し続けていきたいです。

“kichi” started in 2012, the second year after we moved to Izu Oshima. The inspiration was a community space that an architect friend had created in Utsunomiya, on a shopping street with a lot of empty storefronts. I saw people of all ages going in and out of the space, looking as if they were having fun, and thought it would be nice to have a place like that in Oshima. Later, when I was doing a report for “12class,” the free Oshima paper we publish, I met the son of the owner of a jazz cafe that had closed down. As luck would have it, the site became available to rent. That was the origin of “kichi.” “kichi” is a place designed to create a comfortable space for us and for the people who come to visit. We usually put out books, make snacks and talk with visitors. Over time we have been meeting more people and holding more and more events, such as music performances and solo exhibitions.

Because it is located right on the harbor, “kichi” serves as a place that connects the island with the rest of the world, as well as a transfer point between the city and nature. When it was launched, it was made up almost completely of island residents; but now, three years later, about the same number of non-islanders are also participating. And this year, “kichi”'s new project, “Mihairairo,” has begun as part of the Tokyo Artpoint Project (BUNPRO). Here we are starting the interesting undertaking of connecting Oshima with non-islanders through design and art. Being close to Tokyo, many islanders tend to look towards the city, while at the same time, non-islanders are discovering the good points of Oshima. We hope to meet more people who would like to enjoy this island and its rich natural landscape, delicious food and proximity to Tokyo, and we hope continue spreading the word about Oshima's attractions.

Tokyo Creative / Sakiko Hirano

Column

"Letting Go of What's Been Lost"

Often as I walk through Tokyo, I ask myself what used to stand in one spot or another before its current occupant moved in. Usually, I am unable to recall the answer. Something is lost, and something else is born; we all know that this is the process through which the city continuously remakes itself.

Take the cell phone shop on the corner of Komazawa Street, which runs between Ebisu and Daikanyama. If you ask me, the orange sign out front is a bit strange, a bit unsettling. After all, that used to be where Chez Lui stood! I adore canelés and bon gouts – those round, snow-white breads filled with chocolate cream – and as a child, Chez Lui is where I would stop and beg for one on the way home from preschool. Now, however, that memory remains only in my own mind. The actual store disappeared forever on November 18, 2009. Apologies to the cell phone shop, but to me that corner will always belong to Chez Lui. I'll never forget how delectable the first piroszki I ever tasted there was.

I admitted my distress to a friend who shares my affection for Chez Lui. “You know, I said the same thing to an acquaintance who's lived in Ebisu for almost 30 years,” he replied. “This is what he told me. ‘That may be Chez Lui's corner to most people, but before Chez Lui showed up there, it was a candy shop. To me, that will always be the corner with the little candy shop.’”

All of a sudden, my own sense of sadness shrunk down to a tiny speck and was sucked into a crack of history. Someone had been watching the transformations of the city for far longer than I. How deep his longing must be compared to mine! Nothing remains unchanged. I suspect that to be the truth – yet it is also precisely why we value the fleeting moments that sparkle before our eyes. Somebody once said life is full of farewells, but that may not be such a sad statement after all. It's okay to let go of what's been lost. Impermanence is love. Today and every day, Tokyo glitters with a multitude of scenes that we adore, and already miss.

「失われた○○は
求めなくていい」
東京の街を歩いていると「ここ
前なんだっけ？」ということ
がよくあって、その大抵は思い出
すことができない。何かが失われ
て何かが生まれて、その繰り返し
が今日も街を作っているんだなあ

私にとってはシエ・リュイは唯一
無二であの恵比寿店なんだ
そんな苦悩を同じくシエ・リュ
イを愛する友人に打ち明けると、
友人はこんなことを言い出した。

「それがね、もう30年近く恵比寿
に住む知人がいるんだけど、この
話を彼にした時、言ってたんだよ。
みんなにとってあの角は、シエ・
リュイだったかもしれない。だけ
ど、シエ・リュイが出来る前、そ
こには駄菓子屋さんがあったんだ。
僕にとってあの角は小さな駄菓子
屋さんなんです。」
急に自分の悲しい気持ちは小さ
くなって、歴史の隙間にすいこま
れてしまった。ずっと前から、街
の移り変わりを見つめ続けて来た
人がいたなんて。私に比べて彼の
切なさは一歩どれくらいだろうか。
変わらないものなんてない。そ
れは本当のことなんだろう。でも
だからこそ私たちは、目の前の輝
きを、その一瞬を、大切にするこ
とができる。さよならだけが人生
だ、って誰かが言ったけど、案外
この言葉は寂しいもんでもないか
もしれない。失われた○○は求め
なくていい。有限性は愛なんだ。
めぐるめく東京は、今日も切なく
ていとおしい景色に溢れている。

トキョークリエイティブ

文: 平野紗季子
Sakiko Hirano

1991年生まれ。慶應義塾大学卒業。小学生から食日記を付け続ける、生粋のごはん狂。日常の食から始まる感動を綴ったブログが話題となり、現在は雑誌の連載を中心に活動。著書に『生まれた時からアルデンテ』(平凡社)がある。



ってそんなことは周知の事実で。
今、恵比寿と代官山を結ぶ駒沢
通りの角に携帯ショップがあるけ
れど、私に言わせてみればあんな
オレンジの看板はおかしい、違和
感がある。だってあそこはシエ・
リュイだったのに。カヌレとボン
グウ(チョコレートクリームの入
った真つ白な丸パン)が大好きで
幼稚園の帰りにいつもおねだりし
ていたパン屋のシエ・リュイだっ
たのに。でも今やその記憶は私の
脳とインターネットの中にしか残
っていない。存在は2009年11月
18日をもって永遠に失われた。携
帯ショップに辛くあたって悪いけ
ど、私にとってあの角はいつまで
もシエ・リュイのものなんだ。初
めて食べたピロシキがおいしかっ
たことは忘れない。(シエ・リュ
イは今もほかの店舗があるけれど
私にとってはシエ・リュイは唯一
無二であの恵比寿店なんだ)
そんな苦悩を同じくシエ・リュ
イを愛する友人に打ち明けると、
友人はこんなことを言い出した。